

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。  
Copyrighted materials of the authors.

## AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」2016年度第3回研究会（通算第3回目）

日時：2017年3月25日（土）14:00-19:00, 2017年3月26日（日）9:30-13:00

場所：AA 研セミナー室(301)

共催：AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」、文科省科学研究費（基盤研究 B 海外）「バナナから見る農のグローバリゼーションと在来農文化の接続」（代表者：小松かおり（北海学園大学）、課題番号：15H03134）、文科省科学研究費（基盤 B）「グローバル化するアフリカ農村と現金の社会化をめぐる人類学的研究」（代表者：杉山祐子（弘前大学）、課題番号：25284171）

出席者：鶴田格、石川博樹、石山俊、小松かおり、坂梨健太、佐藤靖明、杉村和彦、杉山祐子、田中利和、藤本武、松田正彦、藤本武、安溪貴子、加藤珠比、柴田誠、横山智、大石高典、足達太郎、四方篝

### 発表1：横山 智（名古屋大学）

「東南アジア・ラオスの伝統的生業：森林政策によって消えゆく焼畑とグローバル化によって変化する農村」

近年、アジア諸国でも焼畑は減少の一途を辿っている。しかし、いまだに焼畑による陸稲作がリモートエリア住民の生業として重要な役割を占めているのがラオスである。そこで、ラオスを事例に、3つの焼畑農村と1つの水田農村の事例を紹介した。焼畑農村に関しては、焼畑休閑地から得られる経済的に価値を有する林産物、さらに日常生活で必要となる食料や薬草などの多くを焼畑休閑林から得ており、これらの事例から、リモートエリアの焼畑民にとっては焼畑休閑地から得られる生態資源が重要な価値を有していることを明らかにした。しかし、世界的な森林保護の影響を受け、ラオスでも焼畑を止めさせるための各種の森林政策が実施されており、焼畑は急激に減少している。一方、人口増加が著しい水田農村では、農業集約化を促して、環境収容力を高めるのではなく、出稼ぎにより見かけ上の人口を減らし、さらに出稼ぎで得たお金で近隣集落から水田を購入しながら、主食の米の自給を達成していた。これは、グローバル化と結びついた **New agricultural involution** として捉えられる。自給自足的な生活を営むラオス農山村においても、焼畑農村では林産物を国外に販売し生計を営んでおり、水田農村では恒常的な出稼ぎが生活に重要な役割を果たしており、村落外部との関係性が住民の生活を維持していることを明らかにした。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。  
Copyrighted materials of the authors.

#### 発表2：柴田 誠（京都大学）

「アフリカに広がる土壌と養分循環の特徴から持続的な農地利用を考える：カメルーン森林・サバンナ境界域を事例として」

農業とは自然生態系の物質循環の中に人間が介在する活動であり、土壌を含めた生態系から養分を収奪する作業である。したがって、生態系を合理的・持続的に利用するためには元々の生態系の物質循環の特徴を把握する必要がある。農耕活動において、一般に「水」と「養分」は、両立することの少ない資源である。降水量の多い地域では、水は土壌中を上から下に移動するため、無機養分が流出し土壌が貧栄養である事が多い一方、乾燥地～半乾燥地では、土壌は無機養分に富む場合が一般的である。アフリカの特徴は、湿潤地にも牧畜や火入れの影響による人為植生が出現する事や乾燥地には砂質土壌が卓越する事、大地溝帯の分布する東部を例外として平らな地形が優占する事である。農耕にとって問題となる主要なファクターは、年降水量が500mm前後のニジェールなどの乾燥地では風食となる一方、1,000mm前後で大地溝帯の影響から傾斜地が多いタンザニアでは東南アジアと同様に水食となり、1,500mm前後のカメルーンでは溶脱による養分の枯渇となる。このように持続的な農地利用の為に取るべきアプローチが、気候と土壌に対応して大きく異なる。更に、同じ湿潤熱帯でも、焼畑移動耕作における休閑期間中に肥沃度が回復しやすい土壌とそうでない土壌がある点について、カメルーンとインドネシアを例に紹介を行った。

#### 発表3：四方 篤（京都大学）

「アフリカ熱帯雨林の焼畑をめぐる森と人のかかわり」

カメルーン東南部に居住する農耕民バンガンドゥの農業実践や森林資源利用を事例に、アフリカ熱帯雨林の焼畑をめぐる森と人のかかわりを探るうえで必要となる視座について論じた。バンガンドゥの農業は森林休閑型の焼畑を基盤としており、その特徴は主食作物バナナの栽培・収穫と二次植生の回復とが同時に進行するという点にある。このような焼畑の実践は、継続的に作物を生産するとともに、地域の生態景観のなかに遷移段階の異なるモザイクを創出し多様な森林資源を提供する。また、人びとは商品作物のカカオを焼畑における植生遷移のなかに組み込んでいる。競合することの多い自給作物と商品作物の併存が可能となっているのは、かれらの生活基盤としての焼畑がもつ、森と人との相互関係を損なうことなくカカオ栽培が実践されているからであり、そうした実践をとおして多様な生態景観も維持されている。報告の最後では、近年の考古学や古生態学の知見から、カメルーン東南部を含むサンガ川流域に分布する森林植生は、150～200年前の焼畑等による攪乱を受けた後に形成された可能性が指摘されていること、また、そうした森が現在の焼

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。  
Copyrighted materials of the authors.

畑ないしカカオ畑の生態基盤となっていることを紹介した。以上をふまえ、今後の研究では、アフリカ熱帯雨林の焼畑がダイナミックなシステムであることを理解し、より長期的な視座から焼畑を評価する視座が必要となること、そのうえで焼畑のもつポテンシャルを引き出す道筋・条件を探る姿勢が求められることを論じた。

#### コメント1：坂梨健太（龍谷大学）

カメルーン熱帯林は人口がかなり希薄なため、農業における労働力をいかに確保するかが問題となる。土地は基本的に余っており、移住や畑の開拓の余地はまだ存在する。自給用の焼畑についても、カカオ生産についても、基本的に労働力が不足しているなかで、いかに人に投資をして労働力を確保するかが重要である。資金をもっていれば多量の労働力動員が可能になる。資本金の多寡によってカカオ畑をひらく面積が異なってくる。他方で、子供の教育に投資をしたため子供が農業を継がなくなる、という現象も起きている。ガーナでカカオ生産が衰退した原因のひとつは、こうして若い世代が農村に戻ってこなくなったことにあるといわれている。逆に都市のエリート層が農業投資をして大規模なカカオ畑を開くことも起きている。また短期的な利益を求めて被陰樹を必要としないハイブリッド種のカカオが導入されているが、それは今後森林とカカオの共生関係に影響を与える恐れがある。

#### コメント2：小松かおり（北海学園大学）

焼畑の技術的・社会的性質を考えるうえで粗放性（エキステンシブネス）という表現が何を意味するのかを再考しなければならない。それは、焼畑に基盤をおきつつ、ほかの生業に柔軟に労働を投下していくような生業選択の柔軟性という意味を含んだ概念として考えるべきだろう。農業革命あるいはイノベーションという概念についても、狭く農業技術のみの話と考えるのではなく、暮らしの全体の中での農業技術、生業を行う環境の選択、土地保有、共食などの諸要素の組み合わせとして複合的に捉えてはどうだろうか。またアフリカでみられる移動性の背後にある駆動力を説明できれば、農村の動態を把握する突破口になる。また焼畑など在来技術（在来性）が政治的に利用される、という動きがあるが、これが従来が生業の持続性・柔軟性を発展させる方向に進むのか、あるいは逆に足枷となるのか、注視していく必要がある。